

＜講演抄録＞近代建築の世界遺産化

サステナブル居住研究センター センター長 深尾 精一

本報は、平成 28 年 11 月 8 日「サステナブル居住研究センター研究報告会」から、深尾精一センター長の講演内容を抄録としてまとめたものです。

【はじめに】

世界遺産の建築を見て歴史を考える、みなさんに歴史を考えてほしいという、講義っぽいお話をさせていただきます。これはちょっと前に、わたくしの出身中学校から卒業生が講義をするというのを頼まれて、そのときに、中学生でも分かる話というので用意したパワーポイントです。中学生に話すので少し勉強風じゃないといけないというので、「歴史を考える」となっております。どうしてこのような話にしたかという、ご承知のように上野の西洋美術館が世界遺産になりました。だけでも、なぜ日本の現代建築の中でどうしてあれだけが世界遺産になるんだろうかと、普通の人にはみんな疑問に思うんですね。「ル・コルビュジェのものだから」ということを言われれば、建築の勉強をした人は分かりますけれども、一般の人は分からないので、そういう話をしようと思ったということです。

【ル・コルビュジェの建築作品】

これがル・コルビュジェの西洋美術館です（写真 1）。なんでこれが世界遺産か、こういう建築は他にもいくらでもあるじゃないかというふうに思いますけれども、これは 1959 年、戦後すぐのものです。1959 年にこれだけのものができたということは、やっぱりこの建築に対してはすごい力を入れて造ったのだと思います。ル・コルビュジェの建築作品の一つ、つまり 17 個の中の一つ

として、今回は世界遺産になりました。色々な戦略があって、もっと二十幾つ出そうかというものあって、これはもう 20 年越しの計画でようやく取れたようですね。その中で、日本のものもその中に入れよう、日本の政府のバックアップもあると。フランスが主体ですけれども、全世界のものとして出したほうがいいんじゃないかということで、今回これが取れたわけです。

コルビュジェの言った、近代建築の 5 原則の中で、ピロティもあるし水平な屋根だしというようなことで、コルビュジェが現場管理をしたわけでもないですから、私はコルビュジェの中でこれは、それほどコルビュジェらしいとはあんまり思わないですけれども、でもやっぱりコルビュジェの要素はたくさん入っているんですね。

世界遺産というのは、登録基準に 10 個、要件というのがあります（図 1）。この 10 個の内の、複数でもいいんですけども、どれかに当てはまってないと駄目で、このル・コルビュジェの建築作品に対して、今回登録されたのは、1 番、「人間の創造的才能を表す傑作」が一つ。これは、コルビュジェは天才だったということです。2 番、「建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発



写真 1 西洋美術館

世界遺産の登録基準

- (1) 人間の創造的才能を表す傑作である。
- (2) 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである。
- (3) 現存するか消滅しているにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。
- (4) 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。
- (5) あるひとつの文化（または複数の文化）を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である（特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの）。
- (6) 顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある（この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。
- (7) 最上級の自然現象、又は、類まれな自然美・美的価値を有する地域を包含する。
- (8) 生命進化の記録や、地形形成における重要な進行中の地質学的過程、あるいは重要な地形学的又は自然地理学的特徴といった、地球の歴史の主要な段階を代表する顕著な見本である。
- (9) 陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や動植物群集の進化、発展において、重要な進行中の生態学的過程又は生物学的過程を代表する顕著な見本である。
- (10) 学術上又は保全上顕著な普遍的価値を有する絶滅のおそれのある種の生息地など、生物多様性の生息域内保全にとって最も重要な自然の生息地を包含する。

図 1 世界遺産の登録基準

展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである」と。つまりこれは、歴史の流れの中である意味を持っているというものと、世界遺産に値するという事です。それから 6 番、「顕著な普遍的価値を有する出来事(行事)、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある」。ただ、「この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい」。つまり 6 番だけでは世界遺産にはならないということなので、今回のコルビュジエは 1 番と 2 番でもらったということなわけです。

【オペラハウスと住宅部品開発センター】

世界遺産で一番新しい建築は、この 1973 年に出来たシドニーのオペラハウスなんです。この 1973 年というのは、住宅部品開発センター（現ベターリビング）ができた年です。ですから、つまりこれは一番新しいだけけれども、これは世界遺産にもなっているということですから、部品開発センターの歴史というのは世界遺産になるぐ

らいの歴史を持っているということだと思っんです。これは「人間の創造的才能を現す傑作だ」。これだけで取っているんです。つまりウツソンのこの造形を本当はできなかったんだけど、アラップが苦勞してつくった。で、できちゃった。そうすると今やもうオーストラリアのシンボルですから、そういう意味で世界遺産にしていいでしょうということになったんです。逆に言うと、1 番だけということは、歴史的には、ポッとできたもので、歴史の中の位置づけとしてはまだそんなものはないということになります。



写真 2 オペラハウス

【アイアンブリッジ (1779)】

こういう近代建築がどういうふうになってきたということをさかのぼると、1779年ぐらいにさかのぼる。歴史で習いますけれども、産業革命が18世紀の半ばにイングランドの真ん中辺りで起きるんです。そこでコークスを使った製鉄業が発展して世の中が急激に変わっていった。セヴァーン川が流れていて、そのときにアブラハム・ダービーという人がそこに鉄を大量につくれるぞというので、鑄鉄が主ですけれども、あと鍛鉄、錬鉄でこういうものができる。この年表(図3)で言うと、はるか一番上にこういうものができて、これから歴史がだんだん変わっていったんです。今日お見せするのは、全部僕が撮った写真です。深尾は世界中とまではいかないけれども、いろんな所に行って遊んでいるんじゃないかと思われますけれども、これも2010年に行ってきました。1987年に世界遺産に指定されていますから、世界遺産の中で最も古いわけではないんですけども、相当古い。これは、先ほどのコルビュジェの1、2、6に加えて4番「歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である」も入っている。アイアンブリッジはやはりこのことが重要なんだと思います。



写真3 アイアンブリッジ

【アル=ケ=スナンの王立製塩所 (1779)】

ほぼ同じ時に、こういう様式建築がいろいろ不思議な形になっていくものの代表作とっていいんだと思いますけれども、ルドゥという建築家が、フランスの絶対王朝ルイ15世の命令で王立の製塩所をつくるということで、これも世界遺産になっている。これは1、2、4でなっていて、もう一つ別の製塩所とカップルでなっています。実は半分しかできなかつたんですけども、ルドゥがまさに絶対王朝の王権にふさわしいような壮大な計画を立てて、それが実際にできていると。世界遺産ですけども、行ってみるとほとんど人はいなくて、地元の人たちがこの広場で遊んでいるというような感じです。世界遺産になると、わーっと観光客が押し寄せることが多いんですけども、ちょっとフランスの東部の不便なこともあってこんな感じです。その絶対王朝が10年後の1789年にフランス革命で変わるわけですけども、そういうことと産業革命が起きてくるなんていうことは十分関係しているのじゃないかな。



写真4 アル=ケ=スナンの王立製塩所

【産業革命の頃の建築】

これは、ぐーっとその後、年代が新しくなりますが、産業革命が起きて大英帝国がいろんな貿易をして、リバプールがいろんな植民地から物を持って来る基地になるわけです。そこに 1948 年にこういう建物が建ちます。アルバートドッグ（写真 5、6）と呼ばれています。レンガ造に見えますけれども、大きな荷重を支える倉庫で、そこに鉄の柱が建っていて鉄の梁が掛かっている、それで床を支えています。大体こういう構造は 1800 年ぐらいからイギリスで出始めるんですけども、1840 年ぐらいになると構造力学もかなり発達してきて、どういう梁をかけたらできるかというようなことが分かってくる。それで、この 4 層ぐらいのレンガ造りに見える倉庫でもこういう鉄鉄を使って立派なものができます。ただ、床スラブというものはできません。木でつくるかもしくは、レンガで薄いアーチをかけて床をつくるしかなかったのです。今のような床ができるようになるのは、鉄筋コンクリートで 1900 年ぐらいです。今から 100 年ぐらい前にならないと鉄筋コン



写真 5 アルバートドッグ（外観）



写真 6 アルバートドッグ（内観）

クリートの床ができなくて、それまではこのように伝統的につくっているわけです。今みたいなものは、倉庫とか非常に産業と結びついた、本来アーキテクチャーじゃないものにそういう技術が使われるんです。いわゆるアーキテクチャーの建築は、例えば、ネオゴシックみたいなものとかそういう伝統的なものとして作られています。

その例として、これはウェストミンスター宮殿（写真 7）でイギリスの国会ですけれども、ほぼ同じ頃はこんなものができていた。けれども同時期に、1848 年ぐらいに、これはキュー・ガーデン（写真 8）という、これも世界遺産ですけれども、イギリスのヒースローとロンドンの真ん中辺りにあるキュー・ガーデンという所にパームハウスという温室があります。この頃、植民地から持ってきた物を、王様が熱帯植物を楽しむということで温室部分ができるんですけども、それはガラスの生産が容易になったことと、アイアンでこういう格好がつけられるようになったので、こんなようなものができ始めました。



写真 7 ウェストミンスター宮殿



写真 8 キュー・ガーデン パームハウス

【19 世紀後半の建築】

これはセント・パンクラス（写真 9、10）というイギリス、ロンドンの駅ですけれども、1867 年ぐらいになると、もう鉄を使って、終着駅に大きな屋根をかけるというようなことが始まるんです。今でもこういうものは大切に使われていて、当時これは鋳物の鉄に、ダービー社でつくったということが全部浮き彫りになっている。台座の部分にもその年代が書いてある。やっぱりこういう年代が書いてあって、それを今でも使っているとすばらしいですね。150 年前です。ただ、駅舎の表に出てくる部分は 1867 年でもこういうスタイルでまだつくっていったということです。これは世界遺産じゃありません。こんな感じで作ったという紹介です。ただ、この頃はまだアスファルト防水がないので絶対に屋根をかけなきゃいけないということで、架構して屋根をつくっていた時代です。



写真 9 セントパンクラス駅（外観）



写真 10 セントパンクラス駅（内観）

この 19 世紀末というのは、技術がどんどん発達してきますから、エッフェルが出てきてエッフェル塔をつくったりするわけです。これはエッフェルの弟子だったと思いますけれども、ビスカヤ橋（写真 11）というスペインのビルバオの近くに河口から船が上がってくるんです。その頃はまだ海運が主で、黒船がもう日本に来た後ですから蒸気船もありますけれども、帆船が多くて帆船はマストの背が高いからそれが河口を上がってくると橋を架けられないわけなんです。だけでも向こうに行きたいというので、こんな橋ができた。

どういう橋かという、これは高いところに橋が架かっていて、フェリーと同じような形のを上から吊っているんです。ほとんどフェリーと同じような形でやるけれども、全体は橋になっていて、下を船が通ると。エレベーターがあって上も歩けるんですけれども、当時は自動車じゃなくて馬車を運んでいたんだと思いますけれども、こんな橋。これも世界遺産です。



写真 11 ビスカヤ橋



写真 12 ビスカヤ橋 “運搬” の様子

【19世紀末 構造技術の発展】

1889年、フランス革命100年記念としてパリ万国博覧会が開かれるわけです。そのときにシンボルタワーとしてエッフェル塔が建つ。エッフェル塔が世界遺産と言っていいかどうかは分かりませんが、パリの歴史的建築物ということですね。現存はしていないですけれども、同じ時にできた万国博覧会のマシナリーホール（La Galerie des machines）という機械を展示するための建物があります。これは100メートルスパンの巨大な空間が、もう当時できていました。この頃で大体、構造技術はある意味何でもできる時代になっていたということでしょう。

ただ、その後1889年、今のはまだスチールではないですけれども、ほぼこの頃アメリカでスチールの量産が始まって鋼構造ができるんです。そのような中で、いろんな構造が出てきてガウディなんていう建築家が、これは登録基準で言うと1番の天才的なものなのでしょうけれども、カサ・バトリョ（写真13）、それからカサ・ミラとかこういうものができて、これももちろん世界遺産です。

ガウディはこういう造形が有名ですけれども、鉄を使ったりコンクリートを使ったりとか、そういうことを当時始めていて、技術的な裏付けもあって、それまでにないものをつくり始めるわけです。多分このような構造なんて、それまでの技術じゃできないわけです。新しい技術だからこそこういうことができる。組積造ではあり得ないことをしているわけです。サグラダ・ファミリア（写真14）は1883年から建設が始まっていて、いつできるかと言っていましたけれども、急にできることになって2026年にはできるということに今はなっているらしいです。ただ、サグラダファミリアは、まだできていないのに世界遺産という、大変不思議なものですね。僕の印象では、現代の技術を使ってつくり始めちゃっているんで、本当にこれでいいのかという気はしますけれども、サグラダ・ファミリアもできています。



写真13 カサ・バトリョ



写真14 サグラダ・ファミリア

【1922年 現代建築のはじまり】

さて、いわゆる「モダニズム」に入っていきますけれども、現代建築というのは1922年から始まると言ってよいと思うんです。グロピウスが「ファグス」、これは「靴工場」と建築では習うんですけれども、ファグス靴工場というのは正しくなくて「靴型」、ファグスというのは木の種類の名前で、靴型をつくる木なんだそうです。この隣に同じような工場があって、そこの社員だった人がけんかをして、自分の会社をつくると。それで見返してやるんだと、新しいものをつくるんだということで、グロピウスに頼んでこの工場をつくったそうです。1913年、このコーナーがガラスになっているというのは、この時代としては、画期的にすごいんです。（写真15）

これはもう100年以上たっていて、このファグス靴型工場というのは、建築の教科書には必ず出ているんですけれども、ドイツの中では割に行きにくい所にあつて、実際に行かれた人は少ないと

思いますけれども、これは今年、僕はようやくと行くことができて見てきました。コーナーがこんなふうになっている。100年前ですよ。いまだに靴型をつくっているんです。で、生きているんですね、この工場。

グロピウスはワイマールでバウハウス(写真16)という芸術学校をつくりますが、すぐワイマールからデッサウに移って1926年にはこういう学校をつくります。ワイマールとデッサウと、両方が合わせて世界遺産になっているんですけれども、こうなるともう近代建築ですね、2番と4番と6番という指定理由です。

リートフェルトのシュレーダー邸(写真17)、オランダのユトレヒトに建っているのが1924年で、これもその年代からいうと相当古いというか、こんなときにこんなものができたのかということですが、結局、ヨーロッパが第1次世界大戦で1914~1918年の間、相当大変だった後に、すごいバラ色の時代が来て、こういうものもできたということなんだと思います。そういう意味では、ファグス靴型工場というのは相当異例な、第1次世界大戦よりも前にできているということですよ。

この頃になると、その近代建築が華やかな頃で、かつ組積造から離れて鉄筋コンクリートを使えるようになったということで、コーナーウィンドウができる。それからバルコニーができる。これは両方とも鉄筋コンクリートの恩恵と言っていいと思います。そうすると建築家はぜひともそういうことをしたくなってこんなふうな表現として出すんです。

【モダニズムの集合住宅】

これは口の字型だった19世紀末の大都市の集合住宅に対して、一方を解放した形でつくろうという提案をしていきます。1930年頃の集合住宅ですが、今の日本でマンションの分譲と言ってもおかしくないくらいのものかと思います。ところが1929年から1934年にかけてジーメンスシュタッ



写真15 ファグス工場



写真16 バウハウス



写真17 シュレーダー邸



写真18 ベルリンのジードルンク

ト、ジーメンスという巨大な電機メーカーの社員たちが主に住むことを想定してつくられたもので、これは完全に団地になっています。つまり、この1戸1戸が接道していないんです。道路は南側に通っているだけという形のもので出始める。だから世界遺産のものでも当初のものとは後期のものでは相当違って、隣棟間隔も狭いですが、こんなことになっています。



写真 19 ベルリンのジードルンク

【日本の集合住宅】

これは同潤会の江戸川アパートですが、同潤会の集合住宅の中ではほぼ最後のもので、これはもう壊されてしまっています。これは世界遺産じゃありません。日本の同潤会は集合住宅に関しては全部なくなりましたが、ドイツではいまだに取引をされているんです。そして、世界遺産の中に人々が住んでいます。

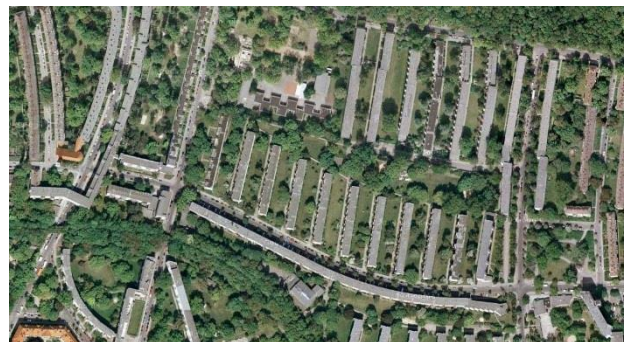


図2 ジーメンスシュタット (Google Earth より)

これは端島、通称「軍艦島」と呼ばれるもので、そうやって考えると、端島は 1916 年からでき始めているので、とても古いんです。世界に誇ってもよいと言えるかもしれませんが、この写真を見ると本当に軍艦ですよ。巡洋艦に似ている。駆逐艦かなんとかという、特にこの艦に似ているという話はあるそうですけれども。行ってみますとこういう状況になっていて、一般の見学コースではここまでしか行けないんです。今は完全な廃墟になっています。1916 年はちょうど 100 年前です。鉄筋コンクリートで本当にこういうものができている。ただ、海、自然の力というのはすごくて、波で全部土が取られていると、杭だけが残って、そのような状況が見れるというのもすごく不思議で、建築の構造の教材としては素晴らしいですけれども、まああり得ない状況ですね。



写真 20 同潤会アパートメント



写真 21 端島 (軍艦島)

【近代建築の後半】

さて、近代建築の後のほうになると、その後はまた暗い時代になっちゃいますけれども、1930年ぐらいまでが絶頂期です。これはミース・ファン・デル・ローエがチェコに建てたトゥーゲンハット邸という世界遺産です。これは1戸のこの住宅だけで世界遺産になっているものです。これがすごいのは、この大きな窓の全体が下がるんです。開くんです。実はずっと動かなくなっていたんですけども、割に最近、全面改修されて今はボタン一つで動きます。とてもミースらしい空間です。

ほぼ同じ頃。これはファンネレというロッテルダムにあるたばこチョコレートをつくっていた工場です。鉄筋コンクリートで、一番高い所はやっぱりコーナーウインドウがあります。1930年というところのコーナーウインドウが華やかです。デザインになっていますけれども、これも鉄筋コンクリートの恩恵で、いわゆるマッシュルーム構造、無梁版構造の鉄筋コンクリートの躯体で、工場はかなり重たい荷重を支えられる構造がで



写真 22 トウゲンハット邸



写真 23 ファンネレ工場

きているわけです。それに合わせて外壁はカーテンウォールになっています。

1931年、コルビュジエがサヴォア邸をつくりません。ピロティで、横長の窓で、屋上庭園で、フラットルーフで。コルビュジエは17の作品で今回世界遺産になったわけですが、その中の一つでおまけとして西洋美術館を入れていただいた、と言うと怒られるかもしれませんが、これは東京理科大学の山名先生という先生が本当に努力をされて、日本とフランスのつなぎ役になって、一緒に運動したほうが相互の利益になるということで活躍されたわけです。ところがそのコルビュジエは、水平窓、横長窓、フラットルーフとかなんとか言っていたのにもかかわらず、1955年になるとロンシャンの礼拝堂みたいなことになってしまう。建築家のさがですね。建築家というのは常に新しいことをしていなといけないという、大変な方々ですね。

我が日本に戻ると、富岡の製糸場がこの間、世界遺産になりました。これは1872年です。これ



写真 24 サヴォア邸



写真 25 ロンシャン礼拝堂

を年表に書いてみると、こういう動きの中で「やっぱり富岡って古いんだ」ということが分かります。エッフェル塔よりも古いのです。その頃のフランスの技術者が来て、だけれども大工さんは日本の大工さんですから、木造で格好をつくって、壁はレンガでつくる。だからこれは煉瓦造といわれていますけれども、煉瓦造じゃなくて、木造の中にレンガをはめているというふうに言ってよいのだと思います。明治5年という要石が入っていますけれども。これはフランスの指導でつくって、いわゆるフランス積みなんですけれども、フランス積みというのはフレミッシュ・ボンドというフランダース地方の積み方というのを、明治時代に誤訳してフランス積みといっているので、フレンチ・ボンドというのは世界中にそんな用語はありません。だからフランス積みというのはおかしいんだけど、でもフランスに行くとフレミッシュ・ボンドが多いんです。



写真 26 富岡製糸場

【国立代々木競技場を世界遺産に】

1964年にできた国立代々木競技場。これは世界遺産になるべきだということで、これは、日本が世界に誇れる丹下先生の建築で、西洋美術館があったのだったらこれはしなきゃいけないでしょうということで、榎文彦先生以下、何人かでこれを世界遺産にする運動をついこの間始めて、1カ月ぐらい前に新聞発表の記者会見をして、新聞が報道してくれました。ただ、こういうことは皆さんが賛同していただかないと駄目なので、ぜひこ

こにいらっしゃる方も、代々木を世界遺産にするという、誰か素人に聞かれたら、「それは当然です」と皆さん言ってくださることを期待して、今日の話にしたいと思います。



写真 27 国立代々木競技場

【レガシーとは何だろう】

西洋美術館が世界遺産になることもいいんですけれども、これも実は免震ゴムでレトロフィット化されているんです。国交省も相当以前から頑張っていて、世界遺産になるためには重要文化財もしくは国宝になっていないといけないんです。国で保護していないと世界遺産にならないんです。西洋美術館がこの流れになったときに、50年になっていないのに、特例的に重要文化財にしたんです。重要文化財には、実はそういう規定がなく、重要文化財より格が低い登録文化財制度というのがあって、登録文化財は50年たっていないとなれないんです。にもかかわらず、それより格が上の重要文化財に西洋美術館をしたんです。なので、代々木も重要文化財にしないと、世界遺産には申請できないということで、その辺が大変難しいんです。ということで、レガシーとは何だろうということで、本日の話はこれでおしまいです。

【おわりに】

年表に書いてみると、ベターリビング 43 年の歴史というのは、この歴史の中では長いなというか、やっぱり時代の中では割に時間が長いんだと思うんですけども、歴史の中でもものすごく集中的に物事が動くときと、そうじゃなくてゆったりと流れているときがあって、今日本はどちらかというところの 40 年はゆったり流れてきたんだと思います。これから先どうなるのかということは、このままゆったりいっちゃうのか、それとも大きな変化が起きるのか。変化が起きるとすれば、それにどう対応したらいいかというのが、我々の大きな課題かと思えます。

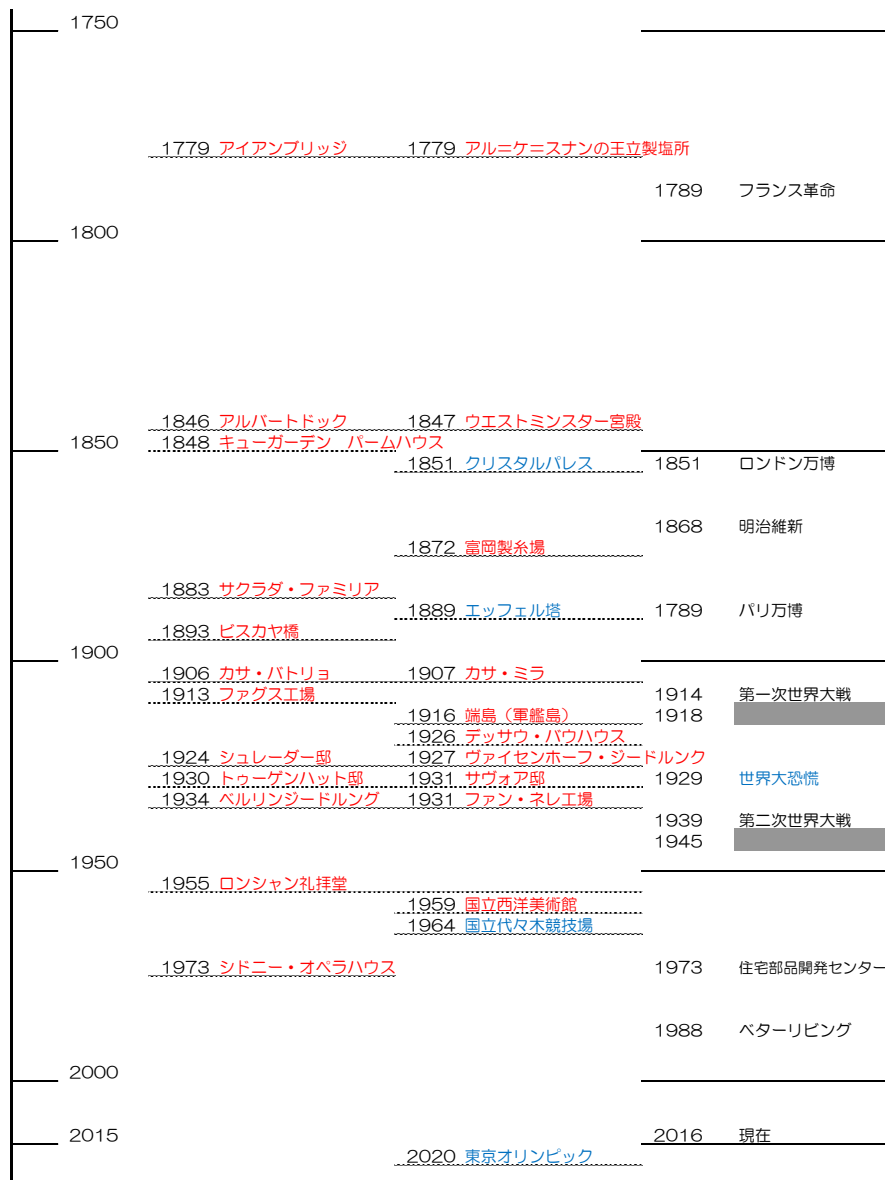


図3 18世紀以降の世界遺産の建築年表 (SLC 研究報告会 配布資料より)